報告

佐伯三十三観音巡り・鶴見

吉田勝重
（会員　佐伯市女島）

第六番札所　西生庵（せいしょうあん）

御詠歌　西の空　影澄む月を　尋ねつつ
　　世の中こしの　浦に来にけり

最初に訪問したのは中越地区の西生庵である。

この西生庵は中越浦の集落の南側、地区中央の道を登りつめた所にある。

米水津小浦の養福寺の末庵で浄土宗鎮西派に属する。

創建年は不詳であるが寺の過去帳には慶長元年（一五九六）の記載があるので、それ以前の創建と考えられる。

寛永五年（一八七三）の火災により焼失。その後再建。現在の建物は昭和四十七年に新築されたものである。無住である。地区老人会区長さんが管理し交代で清掃している。この寺が八百万円ほどで改修された時、寺の廻りから古いお墓が発見された。三百五十年前の物もあった。

境内の入口には、大きな地蔵様と三部妙典一石一字塔、その下には十体の首のない地蔵様がある。どういう謂われかわからない。

本堂には弘法大師像・十一面観音菩薩像・方便法身尊像の御絵像・阿弥陀如来像・弁財天像が祀られている。

一石一字塔と首なし地蔵

本尊　十一面観音像

また、この庵の半鐘には、「豊後藩佐伯浦浦白養福寺末庵ノ中越浦西生庵　常什物施主念佛講中京室町住出羽大掾宗味作」と刻まれている。

庵の降り口に「天保十一子年　當庵中貞到蓮社岸譽浄還比丘　七月五日」と書かれた墓石があった。

この中越地区には昔からの名家で佐伯藩関係の古文書が残されていたという家がある。

この家は中越地区の大きな漁師の家で「弥太丸」という舟の持ち主の家である。

この家に、明治の文豪　国木田独歩が宿泊したという。

小説の中では、この漁師の名前などは出てこないが、小説「鹿狩」の一場面として紹介されている。

方便法身尊像の御絵像・阿弥陀如来像

小説「鹿狩」の中で、「此處は兼ねて聞きゐたさの字の浦（猿戸）で、つの字崎（鶴見崎）の片隅であった…　たった一軒の漁師の家がある。しかし、一軒が普通の漁師の五軒ぶりもある家で、吾等一組が山賊風でどさどさ入っていくと、兼ねて通知してあったことと見え、六十ばかりの此家の主人らしい老人が挨拶に出た。」と書かれている。

この国木田独歩の作品「鹿狩」の構想のもとになったのは、明治二十六年十二月五日の日記である。そこには次のような文が載せられていた。

「二日は土曜日、三日は日曜日、土曜日の夜、鹿狩りに誘われ、弟と吾（わ）し合して十名、桂（葛港）より乗船して、某しと稱する浦前に着き、明くれば日曜日、終日野山に狩り暮らし、その夜は此地に宿し、四日朝、吾等五名は陸地より徒歩佐伯町に帰る。」とある。

この此地が中越であり某と称する浦前が猿戸であった

と言っている。

同行の十名（鹿狩りでは十一名）については、独歩兄弟と中根祚胤（佐伯百九銀行頭取・鶴谷学館経営主任）、大崎護助（鹿狩りの中での今井の叔父さん役・佐伯藩の御船方の家、旧士族の合資会社、合抱社勤務）、水野辰介（判事）、玉置本資（鹿狩りの中での郡長役）、遠城寺邦彦、齋藤才佐、長溝享、阿南勇と小野茂樹氏は「独歩と佐伯」の中に書いている。

私たちは、次の訪問地である福聚庵に向ったが、その途中の天満宮に江戸時代末期の絵馬が残されていると云う。

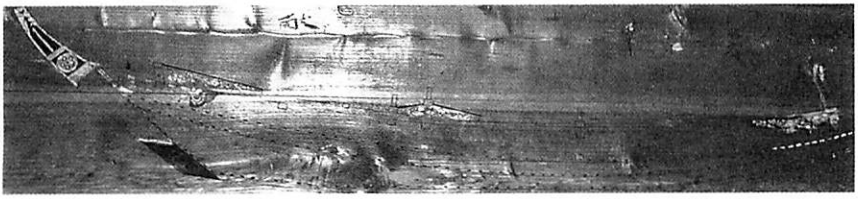
（別府大学檀上先生調）

絵馬は町の文化財で本陣中央に、他の絵馬と共に奉納されていた。絵馬の図柄は「船」である。

このお宮の「船」の絵馬は、その昔、羽出浦で行われていた「ちりめん漁」に使われていた船で、船の長さ等がきめ細かく書かれているという。

二隻の船で囲んで取る漁法であったという。

奉納　武将の絵馬



中越浦の天満宮にある江戸時代の絵馬「ちりめん船」

第五番札所　福聚庵（ふくじゅあん）

御詠歌　頼むぞや　罪をしめしの　さしも草
わが世の中と　いひし誓ひを

この福聚庵は、羽出浦集落の山腹にあり、境内の入り口に「福寿庵」と書かれた石柱がある。神田講師の話では、もともと「福が聚（あつ）まる庵」という意味で附けられたという。

昔、潮谷寺の末庵であり、享保二年（一七一七）切畑村の庵を買い受け建てたという。浄土宗の鎮西派で、享保五年（一七二〇）の庄屋文書によると「境内は立六間、横四間」とある。この庵を立て直した時、旧庵の棟札に「安政五年（一八五八）建立し、その時の棟梁は下野村池田為助正直である」と書かれていたという。

この庵の本尊は十一面観世音菩薩である。御開帳の時以外は開けないという。

年一回の御開帳の時、本尊の左手と地蔵菩薩像の左手が紐でむすばれるという。

外には、樹齢二百五十年と言われる大ソテツもある。

本堂には、厨子やその中に修められている十一面観音像の写真、その阿弥陀如来像、地蔵菩薩像、弘法大師像などが祀られていた。

本陣の上には木彫の飛天が三体奉納されていた。

この他に、「享保二年、福聚庵二世　信州佐久郡平林村」と刻まれた半鐘があったという。太平洋戦争中の金属供出として出され、今はない。

奉納された飛天と弥陀如来像

第四番札所　常照庵（じょうしょうあん）

御詠歌　あまつ日の　浦の真砂の　かたつきに
つきぬ誓いと　聞くぞ頼もし

秘仏十一面観音像と地蔵様

大ソテツ

この常照庵は、日野浦の中央山手にある。登り道の左手には、六地蔵と享和元年（一八〇一）と名の入った無縫塔がある。

その先には完全な形ではないが五輪塔があった。

鎌倉末期のものと言われている。庵は清生寺とも言われており、潮谷寺の末庵である。安政六年（一八五九）に潮谷寺より住職が入居したという記録がある。

本尊は十一面観世音菩薩と阿弥陀如来である。

庵の創建は不詳であるが、庵の左手にある釣り鐘に元禄十四年（一七〇一）の銘がある事から、元禄十四年以前の建立と考えられている。

この常照庵にある釣り鐘の銘には、「豊之後州　海部郡……」と書かれていた。

豊之後州　海部郡
佐伯鶴屋　潮谷寺
末庵　日野浦
常照庵　喚鐘
元禄十四辛巳載
八月十八日
願主
染矢　惣兵衛
同　喜兵衛
浦中志老若男女　敬白
出羽大椽
京室町住
宗味　作

また、本堂の伏鉦にも銘があり、鶴見町史によると「嶺雲山浄挙別場常什物　正徳五乙未祀現住明誉□稱　室町住出羽大掾宗味作」と刻されている。

この日野浦に江戸時代に住んでいた藩士加嶋弥右衛門（旧大友氏家臣）と日野浦の農民、清太夫が、キリシタンとして棄教を迫られ善教寺門徒に改宗している。

しかし、清太夫の子、孫など七名がキリシタンとして、六本松河原（現向島　野菜市場付近）で処刑されている。

この事は鶴見町史「キリシタン大名毛利高政とキリシタン」の項、温故知新録巻一「佐伯古切支丹并類族内死失・存命改覚」（文化五年調べ）に清太夫の系図とともにその氏名が載せられている。

それによると

一　半関（古切支丹）右鮪浦百姓ニ候処切支丹宗門ニ　付百七十五年以前、寛永十一戌年御吟味有之内年齢月日不知病死申候　邪宗門ニ相極候ニ付首獄門ニかけ申候父母　妻相知不申候

一　九兵衛（清太夫三男）右羽出浦百姓ニ候処切支丹宗門ニ付　百七十五年以前寛永十一戌年御吟味有之内　年齢　月日不知　火罪申付候

一　名不知（清太夫四女）右蒲戸浦百姓権兵衛嫁申候処切支丹宗門ニ付　百七十五年以前寛永十一戌年夫　火罪　申付候

一　権兵衛（清太夫婿）右前書之権兵衛同年同日夫婦一同火罪申付候　此者子孫無之　父母不相知候

一　渡与七郎（清太夫孫）右中越浦百姓ニ候処　切支丹宗門ニ付同年月日年齢不知　火罪申付候　同人妻義も一同火罪申付候

一　弥五郎（清太夫孫）右羽出浦百姓ニ候処　切支丹　宗門ニ付同年月日年齢不知　火罪申付候

一　名不知（清太夫孫）右同宗門ニ付　夫一同火罪申付候

一　加嶋清右衛門（清太夫孫庄助六男）右者私召仕候処貞享三寅年五月暇差遣候　大友因幡守方江相勤　正徳二辰年暇取　江戸山中町　大屋久兵衛店ニ罷在、正徳四年午年二月ゟ六角主殿方江有付相勤罷在候　右之者佐伯鉄砲町善教寺旦那ニ御座候処　正徳五乙未年十月七日八十二歳ニ而於江戸表無病死　谷中禅宗玉林寺ニ而取置申し候……と書かれている。

この時、処刑された十一～十二名のうち六、七名が加嶋清太夫の家系である。

この文中の「古切支丹」は切支丹本人である。切支丹と認められた者は、その本人、子、孫、曾孫、玄孫まで監視下に置かれ（女子は本人、子、孫まで）、「類族」と言われ記録に残され監視され続けた。

この地域に多くの切支丹が多くいたことは、「てんす」や「かくれさと」と呼ばれる名前の地が残されている事でもわかる。

また、鶴見町には多くの五輪塔等が残されていたが、工事などでなくなっていると言う。

常照庵の本尊は十一面観世音菩薩と阿弥陀如来である。この他に、地蔵菩薩や弘法大師像などが、本陣の中に置かれていた。

私たちは、次の訪問地である佐伯三十三観音三番札所沖松浦の吉祥寺に向かった。

十一面観音

阿弥陀如来

第三番札所　吉祥寺

御詠歌　補陀洛や　岸うつ波の　音さへも
よせて　松浦の　沖の汐風

三番札所の吉祥寺は、沖松浦の真浦北浦地区を見下ろす高台にある。階段を上り詰めた入り口には、松浦出身の相撲取り八島山の墓があった。江戸末期から明治始めの相撲取りである。

俗名を成松助四郎という人である。

降り口にも八嶋山市蔵の墓がある。この人も江戸末期から明治にかけての相撲取りである。

この明治の頃は佐伯地方から大坂方面に相撲取りとして出かけた者が何人もいる。

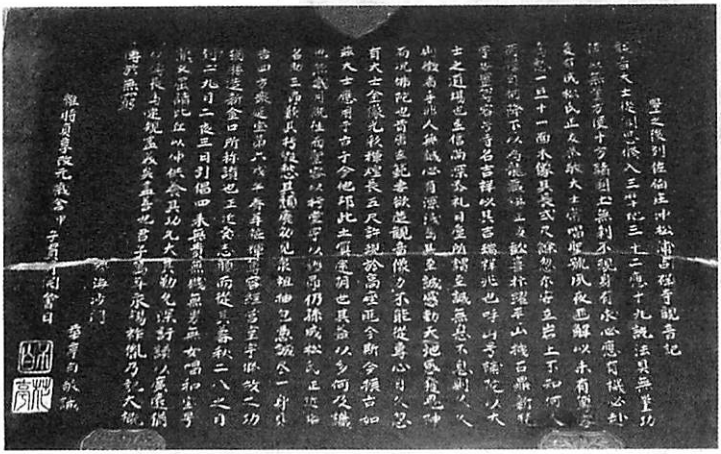
会員の調査を参考にすると十三名以上名前が確認できた。地域としては、弥生、浅海井、浪太、荒代網浦、木立、猪串、蒲江西浦があげられる。

八島山墓

この吉祥寺は佐伯潮谷寺の末庵として元亀二年（一五七一）に創建されている。

本堂の中央には、観世音菩薩像がありその後方に御開帳の時以外は閉められている厨子があり、本尊の十一面観音像が祀られている。

鶴見町史によると本尊右前の板壁に十一面観世音菩薩の刻字板がある。四三六字の縦四〇センチ、横六〇センチ、厚さ二センチの欅の木板に深く彫られている。



豊之後列佐伯庄沖松浦吉祥寺観音記　全文

豊之後列佐伯庄沖松浦吉祥寺観音記

観音大士從聞思修入三摩地三十二應十九説法具無量功
德以無量方便十方諸國土無剎不現身有求必應有機必赴
爰有成松氏正友恭敬大士常唱聖號夙夜匪解以未有尊容
為愁一旦十一面木像具長弐尺餘忽尓安立岩上不知何人
荷擔自何降下以為龍蔵錫正友歓喜抃躍平山掇百貌新梵
宇安置尊容号寺名吉祥以具吉瑞祥兆也呼山号補陀以大
士之道場也至信尚深恭礼日厚所謂至誠無息不鬼則久久
則徴者乎非人無誠必有深浅為其至誠感動天地感發鬼神
而況佛陀也昔唐玄範妻欲造観音像力不能從専心日久忽
有大士金像光彩輝煌長五尺許現於高座匪今斯今振古如
茲大士應用于古于今他邦此土冥途阻世其益以多何及識
也然歳月既往而聖容以拆堂宇以毀昴仍孫成松氏正近俗
名助三郎歎其拆毀愁其頽廃効見宗祖抽包憑誠尽一身具
告四方衆延宝第六戌午春年粧輝尊容経営堂宇修故二功
猶勝造新金口所称讃也正近發志願而其從暮秋二八之日
到二九日二夜三日引倡四耒無貴無賤無男無女唱和宝号
兼又屈請比丘以伸供養其功久大其勤久深訂謨以廣遠稱
以傳長為定規盡美矣盡吾也君子萬年永揚祚胤乃記大概
傳於無窮

勢海沙門
華亭白敬　識

維時貞享改元歳舎甲子貫月開會日　印　印

このように書かれているが、鶴見町史では「起源は元亀二年中秋の満月の夜、巨大なクジラによって運ばれ、吉祥寺眼下の磯辺の岩上にて、成松家先祖の成松正友により発見された」と書かれている（吉祥寺物語より引用）。

なお成松正友の孫、成松助三郎によって、延宝六年（一六七八）以来連綿と続く御開帳の由来も刻されているという。貞享元年（一六八四）華白上人の作品である。

本堂の中央上には「吉祥寺観世音菩薩御由来記　和譯」と書かれたかな交じり文もある。

この文と刻字文とは多少異なるが、だいたいの内容は同じである。此の和譯文の最後に、一つの句が書かれている。その文も、全文記載してみよう。

この和譯は、昭和十一年四月に潮谷寺第二十九世勤譽上人の書かれたものである。

吉　祥　寺

御由来記　和譯

観古音菩薩

折も當補陀山　吉祥寺尓安置し奉る十一面観古音菩薩は　人皇第一百七代正親町天皇の御宇　元亀年間　此地尓成松正友と云ふ人あり　深く観古音菩薩を信仰し　朝暮尊號を唱へて懺(くい)らす　願くハ尊体を奉安して　常住相修し奉らんには　奈何尓歓ばして楽しき古を過さんと　眞心こえて祈り居たるに　正友一日　旦暁　濱辺に至れる一体の尊像　即ち　今の御尊体が磯邊の岩上に立せ給ひ居たるに　正友大いに　打驚き號坐して伏拝み　是ハ何人の何處より持来り立てたるかと　四下隅をと詮議した事る、誰御一人知る者なしとてハ　全く年来日来　我が催し奉る御佛の我が念願御感應致なさせ給ふ　此岩上に立たせ給ふに相違なく感涙ふ覚尓浮ひて　打叱ひ多くの浦人等を私相以参って山上を仰き　磯辺より多くの石を運び平らかなる地面を造り　此尓一宇の御堂を建立し　以て尊体を安置し奉るたる咄の期に　目出度き吉瑞にて御堂成就したるゆへを名けて吉祥寺と稱し　又　菩薩の在りなす山なるを以て　補陀山とぞ號せり　昔　唐の玄範の妻　篤く観古音菩薩を信じ　何とかして菩薩の尊像を　刻まんと思ひしか力及ばず　唯一心不乱に其事のみ常居たるに　美しいかの光彩　凛然と輝ける長五尺の尊体　我家の高坐に現はれ給ふなり　現れ給し正友の一向眞念　菩薩尊像を願求して　尊体を岩上に置かせ給わるを遷一たると　和漢同日の霊験なること忽ち　遊遒遠近に倡捨し　諸方より　當山尓参詣する者　此濱路を絶す　然るに捗埃星移を数十回　この星霜を経て

菩薩の尊像　既に朽ち　堂宇　亦頽毀したるを　宿孫　成松助三郎　独り立木を覗き　謝意を尽くして共に四方衆に告げ　延宝六戌午の春　再び尊容を粧輝し堂宇を経営す　沙門善寧改築を讃美し　記して云ふ　故を償たるハ　功は新しく造るに勝れり　助三郎正近　志願を發し今年秋暮　聖僧を招倖し　多くの老若覚議を招き　菩薩の妙號を唱和して　二夜三日の法筵を開き　以て　永年の規範を為すと　延宝の余を雖る二百七十餘年前の覚者を　當嶽に垂んている　春の風秋の雨ハ　桟を叩き脚を濕し御堂ハ今ハ晟煮　此の尊き菩薩の曾厳は　衰應したるを此の郷土の節たる人々　平素信仰篤き輩　杭、用財力して　本年昭和十余一年ハ著大に御堂の横板を施して元亀の創立　延宝の改造より幾層倍の社殿を加へ以て威霊　益炳着せる本尊菩薩の即加護を祈りまつらんとして前人未東規範を則り　法筵を開くに當り嶺雲山より参加願ざれば補陀山頭　春酎はたして百花芳を競ひ　香煙場を拝して　参詣の群衆屋に満つ　茲に本尊ニ禮拝し　恭く一首を献じて斯の旺憾を祝い奉る

吉祥の場を　栄へ茂　松浦潟
松の嵐ニ　法の聲して

昭和十一年四月吉日

嶺雲山潮谷寺第二十九吞

勤　譽

この吉祥寺観音記・由来記の内容は、鶴見町史の民話の項に「吉祥寺物語」として紹介されている。

吉祥寺の前面には、「豊後屋吉右衛門　寛政九年」と書かれた灯籠が奉納されている。

この豊後屋吉右衛門は、室積村の吉右衛門と呼ばれ塩を商っていた。ぞうの首と呼ばれる吉祥寺への道の怪談話と、それを退治し金もうけした吉右衛門の話が民話が伝えられている。（吉祥寺物語）

二番札所　常光庵

御詠歌　尋ね来る　まつらの観世音
　　ながき闇路を　照らす誓いに

地松浦の西の平の高台にある常光庵は三十三観音の二番目の札所である。

天正九年（一五八一）に建立された浦代浦蔵應山養福寺の末庵である。佐伯三十三観音所では浄迎寺、佐伯西国三十三カ所巡りでは聖光庵とも呼ばれている。

本尊は観世音菩薩で、元禄年中に地松浦の志手に建立されたが慶長十二年毛利高政公により親寺の養福寺にあずけられた。

その後元禄元年十月、当時の大庄屋長助と欣信上人の肝入りで現在地に再建されたという。

この事は本尊観世音菩薩の厨子の裏書きに記されている。常光庵は佐伯四国の八番札所でもある。

地松浦の古文書（山田平之丞氏解読）によると、藩主毛利高政公が目の養生の為、この地を訪れ寺尾の谷の水をくんで療養したという。その時に庵を建てたとある。

沖松浦の寺尾には「カンノン山」「カンノー」と呼ばれる地名が残っている。

常光庵の本陣には、弘法大師像、阿弥陀如来像、毘沙門天像等の像がある。この寺の開山空信上人の位牌もある。空信上人の位牌には、「當院開山法蓮社性譽通直阿上人空信大和尚」と書かれている。

明治四十五年・四十六年に庵の厨子、欄間が改築された。

また本陣中央に置かれている伏鉦には地松浦常光院浄譽欣信元禄元年戊辰十月五日　京

室町出羽大橡宗味作の文字が見える。

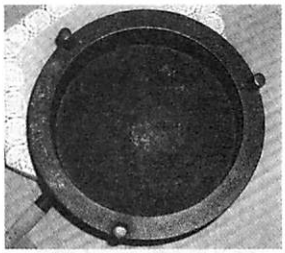
この伏鉦の作者は常照庵の伏鉦（正徳五年作）と同じであり年代的には二十七年間の開きがある。

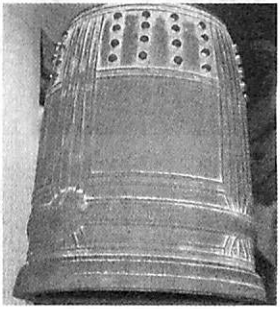
庵の外側にある半鐘には、「元禄二己巳年　四月十五日　佛事門中法器　滛如何是廣度人夫五更喚鐘一声響遠近同時覚睡眠　願ㄱ此功徳　平等施　一切　向發菩提心　往生安楽國」という文字がみえる。

修復された欄間

また、この常光庵入り口には鎌倉時代の一石五輪塔（一つの石で造られている五輪塔）や元禄墓が残されていた。

この常光庵の視察を最後に鶴見町の三十三観音巡りは終了した。視察中、松浦公民館で天明以後の米の値段一覧表や鶴見町の発掘物資料等も見学できた。





元禄二年の半鐘

一石五輪塔

〈参考資料〉

資料鶴見の観音・鶴見町史・若き日の国木田独歩・独歩と佐伯・国木田独歩足跡譜